

氏 名	中津 真美		
学 位 の 種 類	博士（生涯発達科学）		
学 位 記 番 号	博甲第	8208	号
学位授与年月	平成	29年	3月 24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	聴覚障害の親をもつ健聴の子ども（CODA）の通訳における役割期待と親子の関係性に関する研究		
主 査	筑波大学教授	医学博士	□田 栄子
副 査	筑波大学教授	博士（人文科学）	安藤 智子
副 査	筑波大学教授	博士（医学）	高橋 正雄
副 査	金沢大学教授	博士（心身障害学）	武居 渡

論文の内容の要旨

中津真美氏の博士論文は、「聴覚障害の親をもつ健聴の子どもの通訳における役割期待が親子関係の形成に及ぼす影響」について、生涯発達学の観点で検討したものであり、その要旨は以下のとおりである。

（目 的）

我が国において高度の聴覚・言語障害者は31万人とされ、既婚の聴覚障害者の88%の家庭で聴力正常児を養育する(Schin,1974)と報告されている。高度の聴覚障害者では、聴覚音声による会話に制約が生じ、手話や視覚情報を併用することが少なくない。従って、著者は聴覚障害のある親の家庭の聴力正常な子ども（Children of deaf adults : CODA）では、幼少児期より親への通訳（Preston,1994）や、生活上の支援を行う（Hadjikakou,2009）など、young carer の役割を担うことから、幼小児期の養育過程で形成される親子の関係性に固有な特性を導くなど、支援の必要性が高いと指摘した。そこで、著者はCODAの小児期の通訳役割に着目して、小児期の親子関係の状況を明らかにし、CODA の発達と親子の相互作用の視点で、親子関係の形成について検討が必要であるとした。しかし、CODA の実態と発達支援の在り方について、これまで実証的な研究は乏しく不明な点が少なくないことを文献研究に基づいて考察した。

さらに、著者は、当該課題の解決に向けて以下の6研究で構成した。すなわち、1) CODA が聴覚障害のある親に行う通訳役割の実態を明らかにする(研究1,2)。2) 通訳の役割期待に基づいた、CODA と親の心理的状況と変容について、発達の視点で明らかにする(研究2,3,4)。3) CODA の親子関係と心理的状況に関する構造モデルを抽出し、親子の相互性の観点で検討する(研究5)。4) CODA 親子の双方の意向に基づいて親子を類型化し、関連する要因を明らかにして(研究6)、支援の在り方について検討することを目的としたものである。

（対象と方法）

本論文では、第2章の先行研究の動向に基づいて、第3章では、23歳以上のCODA29名と、聴覚障害のある親22名の計51名を対象として、4種の個別の面接調査研究を実施したものである。第3章(研究1)では

CODA5 名に対し通訳役割に関して叙述を得て KJ 法により概念生成し、通訳役割の実態および、親子関係・心理的状況に関する分析可能性について検討した。第 4 章(研究2)では、CODA25 名と親 19 名に対し、面接叙述に M-GTA 手法を用いて CODA 親子の心理的状況と発達変容に関する概念を生成した。第 5 章(研究3)では、CODA21 名と親 19 名に対し、CODA の通訳場面における感情状態に関して心理尺度を用いて評定を求め因子構造を抽出し発達変容について分析した。第 6 章(研究 4)では CODA21 名について、通訳役割の認識から親の通訳役割期待を受け入れるまでの期間に関わる個人差を検討した。

また、研究 5、6 では研究 1～4 で生成された概念を用いて、CODA の通訳役割と親子関係に関する評定尺度 2 種(親用・CODA 用)を開発し、同質問紙を用いて、CODA104 名と、聴覚障害のある親 97 名を対象として、自記式質問紙調査を実施したものである。第 7 章(研究 5)では、まず叙述より得た生成概念を用いて調査尺度を開発し、CODA 親子 203 名を対象として、CODA と親それぞれについて通訳役割期待に基づいた親子関係の形成と心理的状況の構成因子を抽出した。さらに重回帰分析を用いて CODA と親それぞれの観点で親子関係を規定する諸要因の構造モデルを解析した。第 8 章(研究6)では、CODA 親子対応する 57 組 114 名の調査結果について、クラスター分析を用いて分類し親子関係の類型化と特徴について検討したものである。

(結 果)

1. 研究1では、CODA の通訳役割は、音声情報の伝達機能と、親の課題解決の代理機能で構成された。CODA の通訳役割に注目することで、CODA の親子関係と心理的状況に関わる解析が可能と考えられた。通訳役割には、自身、親、社会の 3 領域の叙述を認めたとした。
2. 面接調査の質的解析により CODA の通訳役割を通して、CODA の発達過程で親子の心理的変容の概念図が構成された。児童期から青年期・成人期に向けて、CODA は無意識の役割遂行から、社会的関係および親に対する認識により葛藤が生じるが、成人期に関係を受け入れる経緯が示された。親は CODA への通訳の依存姿勢と子育ての困惑・聴者社会との相違などの葛藤を経て、成人期に CODA の自立と共に、CODA と向き合う志向を抱き、親子は新たな関係性を構築した(研究 2)と指摘した。
3. 青年期から成人期の通訳役割に関する感情状態については、CODA の肯定的感情は親の評価より低値であり、成人期に CODA の否定的感情の減少により両者は近似した(研究 3)。CODA が親の通訳役割期待の受け入れに至る期間について、一部で長期化が認められマイナスの感情との相関(研究 4)を指摘した。
4. CODA は平均 5.27 歳の幼少期から高頻度に通訳役割を担い、親の課題解決の代理機能を伴う高度な役割を担っており、とくに両親が聴覚障害者でろう学校卒の CODA では通訳頻度が高かった(研究 5)とした。
5. 重回帰分析により CODA 親子関係の構造モデルが示された。CODA 調査では 2 因子を抽出し、F1:親の積極的擁護因子は、独立変数として親との会話成立レベルが高く、障害を受入れ、両親聴覚障害者等の要因に規定されるモデルを示した。F2:親の不可避的擁護因子は、独立変数として会話成立レベルが低く、通訳頻度が高く、親の障害への困惑と、親との関係を回避する要因に規定された。親調査では、親子関係に関わる 1 因子(CODA への被擁護)を抽出し、独立変数として子育ての困惑・不安が高く、高年齢、さらに障害に対する引け目などの要因に規定された(研究 5)とした。
5. クラスター分析により CODA の親子関係に 3 類型が抽出された(I:回避による自律傾向型:親子が自律を志向して関係を回避する傾向。II:親愛傾向型:CODA が親を支援し、親側は自律を志向した親愛的な関係。III:役割逆転型:親側の擁護・子側の被擁護の関係が逆転する傾向)とした。CODA 親子に対しては、各類型による個別性を配慮した支援が重要であるとの結論を示した(研究 6)。

(考 察)

著者は本研究では、CODA が親に対して行う通訳役割の実態と、役割遂行に基づいた心理的状況・親子関係に関して、発達の視点から構造と類型とを解析したものであり、CODA の通訳役割に着目することで、親子関係や社会的環境を包含した一連の実証的知見が得られ、研究的な意義を有すると指摘した。

また、CODA の親子関係については、通訳の役割期待に基づいて形成された固有の発達傾向が認められ、CODA の親を擁護する意向、親の CODA への被擁護の意向に関わる因子構造に特徴があると指摘した。親子の会話成立と、親の障害受容は良好な関係への促進要因として重要であり、通訳頻度の高さは負の関与を認めたと指摘した。さらに、本研究で示した構造モデルを基に親子類型を参照し、個別性を配慮した CODA 親子への対応の視点が重要であるとした。本研究で、CODA の親子関係で生じた心理的状況における課題は、当事者、親子、社会の三者で構成され、発達系列で変容することが明らかとなり、CODA 支援については、関係者間で広域にまた生涯発達の各時期に連続した支援指針の策定が重要であると結論付けた。

審査の結果の要旨

(批 評)

本論文は、これまで不明な点の多いCODAの親子関係の形成について、当事者と親の両者に対する調査尺度を開発の上、解析を試み、関係形成の機序と課題について明らかにしたものである。とくに、CODAの通訳役割に注目した解析視点は、後方視的叙述を容易にし、親子関係の特徴を浮き彫りにする上で有効であり独創性について高く評価できる。本研究では、CODA親子の関係性と心理的状况について、当事者・親子・社会の三者で構成される機序について実証し、支援の指針の構築に結び付けるなど臨床的意義を有し、成果は聴覚障害学における新規知見を有する優れた論文と評価できる。

平成29年1月21日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（生涯発達科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。